●九州

高坂 葉月

コロナ禍の混乱の中で延期されたコンサートのリベンジがいくつか行われた2024年。コロナ以前の演奏会風景がようやく戻ってきた九州の音楽シーンについて，福岡を中心に振り返ってみたい。

九州随一のプロ･オーケストラとして存在感を放つ九州交響楽団（以下，九響）を10年以上にわたって率いてきた小泉和裕が，第419回定期演奏会（３月）を最後に常任の音楽監督の席を降りた。ベートーヴェンとR・シュトラウスという，ドイツものを得意とする小泉にとって鉄板の選曲で，音楽の機微をドラマティックに物語る。特に「英雄の生涯」という一人の人生の軌跡を描いた曲は，円熟の小泉，そして楽団の成長の軌跡と重なるようでもあった。惜しまれつつ，大きな拍手に包まれて指揮台を降りた小泉は，終身名誉音楽監督という立場で，引き続き九響を力強くバックアップする。

音楽監督のバトンを引き継いだのは30歳になったばかりの太田弦だ。注目が集まる初回の第420回定期演奏会は２日連続で行われた。太田の演奏は団員のモチベーションを引き出し，表情豊かな音楽を共創していくスタイル。開演前のトークにもにこやかに現れ，聴衆とのコミュニケーションにも積極的だ。ショスタコーヴィチの交響曲第５番は特に幅広い表現力を要する作品だが，太田の耳の良さと感覚の鋭さが際立つ好演。この日の瞬発力ある演奏を出発点とし，太田と九響メンバーが今後時間をかけて築いてゆく新たな伝統にも期待したい。

九響は一方で客演指揮者への適応力も高く，毎回違った表情の演奏で聴衆を楽しませ，表現の引き出しを増やしてゆく。第421回定期では下野竜也の指揮のもと，バロックオーケストラさながらの親密で質感豊かな響きを披露。さらにウェールズ弦楽四重奏団をソリストに迎え，シェーンベルクがヘンデルの合奏協奏曲をもとに創作した「弦楽四重奏のための協奏曲」を演奏した。九響が音のバランスや響きの調整にいつも以上に気を遣い，音楽の流れを構築するプロセスが見えるようだった。ユベール・スダーンが振った第424回定期（ベートーヴェン／「エグモント」序曲，交響曲第７番）も印象に残る。和声のバランスや音楽の細かなスピード感が指揮者と奏者の間で共有され，安心感のある音楽づくり。中低音の歌わせ方も巧みで，特に交響曲第７番第２楽章の冒頭ではヴィオラとチェロによる豊かな歌の重なり合いと，そこに生じる和声の変遷を静かに辿る瞑想的な時間が流れていた。

近年，九響が仕掛ける幅広い客層へのアプローチも，着実に効いてきている。2022年から始まった「マタニティ・コンサート」は毎年満員御礼の人気ぶりだ。そして来年度からは，夏休み恒例のサマーコンサートを「夏休みリラックス・コンサート」にアップグレードし，普段は劇場に足を運びにくい人も含め，年齢や障害をこえて，誰もが楽しめるコンサートを目指すという。社会の多様性と人々のニーズを捉えた上での企画の拡張は，地域にとってよろこばしいことである。

ここ数年のうちに九州で開館，あるいはリニューアルした場でも新たな試みが定着しつつある。2020年に開館した柳川市民文化会館「水都やながわ」の白秋ホールでは，ポーランド出身のイグナツ・リシェツキがアーティスティック・ディレクターを務めている。東欧にフォーカスした前年に続き，2024年はウィーンゆかりの作品にスポットを当てた「水都やながわ五つ星コンサート」を主催。音楽学者の堀朋平によるプレトークに加え，会場前の広場にオーストリア料理を用意するなど，音楽を聞く頭と体の準備ができる仕立てだ。シューベルトの「鱒」のような馴染みある曲から，日本初演となるスクウェレスの「インパクト」のような現代音楽まで幅広い選曲。前年よりも客足が多く，地元に根づきつつある様子が見えた。

ここではまた，地域に密着した興味深い取り組みが並行して起こっている。2019年に結成された「白秋のまち《海道東征》合唱団」は，戦後，歴史的に難しい立場に立たされた信時潔のこの作品を白秋ゆかりの柳川の地から広め，歌い継ぐことをミッションとする団体である。白秋生誕140年のプレイベントとして行われた１月の演奏会では，子どもも含め160人超えの合唱団が，現田茂夫のドラマづくりの手腕に導かれながら，起伏に富んだ音楽を響かせた。

土地の歴史や文化を意識したホールの動向としては，大分県竹田市のグランツたけた（2013年の豪雨災害で被災・閉館した竹田市民文化会館の後継施設で，2018年に開館）も注目に値する。「蝶々夫人」のモデルといわれる，竹田ゆかりの二人の女性「グラバー･ツル」と「おカネさん」にフォーカスしたオリジナル作品を市民参加型で創作し，2022年度にミュージカル，2023年度にオペラを発表。オペラ上演を可能にしたのが，大分初のプロオーケストラ「RENTARO室内オーケストラ九州」である。この団体は，2020年の竹田版アーティスト支援事業に参加したメンバーを中心に2021年にTAKETA室内オーケストラ九州として誕生。23年８月には大分県佐伯市と連携協定を締結し，24年も地方都市に積極的にオーケストラ音楽を届ける活動を継続した。

コロナ禍ではクラシックコンサートの配信の可能性も大きく広がった。一方で，生演奏の場を共有する価値もいっそう高まり，生きた活動としての音楽を届ける試みが，様々な形で広がっているように感じられる。九州で長く続く音楽祭のひとつ，宮崎国際音楽祭にも変化があった。2024年，劇場の改修という事情もあったが，29回目の開催にして初めて宮崎市以外の県内広域にわたる複数都市で公演が行われた。また2024年中の開催はなかったものの，大分のiichiko総合文化センターの音の泉ホールでは2023年から「音楽のアーティスト・イン・レジデンス」が行われている。完成された音楽を披露するコンサートのみならず，奏者らが音楽を作り上げていくプロセス自体を楽しめる企画だ。2025年２月に２年ぶりの開催となる。

最後に，クラシック音楽の従来の枠からは逸脱しつつ，研ぎ澄まされた表現を模索する試みも紹介したい。作曲家の河合拓始は，この４年間，毎年12月にアクロス福岡円形ホールで独創的な取組を披露している。昨年は江戸時代の思想家，安藤昌益の著作「自然真営道」(1753年)への共感を，「自然真栄楽」と名付けた総合的なパフォーマンスとして具現化した。今年はそのスピンオフの位置付け。昨年演奏した「四行妙道の楽」という器楽五重奏の編成で，十数曲の作品を新たに制作。糸島での生活で出会う土着的なリズムや言葉のイントネーションが，西洋音楽の礎の上に洗練された形で重ねられた面白い聴体験だった。

本稿では取り上げられなかった試みも数えきれないほどある。アフターコロナ時代の芸術は，地域にこれまで以上に活力を与えることが求められている。演奏会に足を運ぶのが難しかった人，クラシックの演奏会とは無縁だと思っていた人にもリーチできる場や制度づくりが，今後さらに期待される。

高坂葉月（こうさか・はづき）

群馬県出身。東京藝術大学音楽学部楽理科卒業，同大学院修了。在学中，オーストリア政府奨学生としてグラーツ芸術大学およびインスブルック大学に留学。音楽学博士（東京藝術大学）。2015年～ 18年，九州大学大学院芸術工学研究院ソーシャルアートラボの学術研究員として，複数のアートプロジェクトの企画運営に関わる。西日本新聞や雑誌『音楽の友』にて批評活動も継続的に行っている。平成音楽大学非常勤講師。